CAMPUS TREASURE Vol.4
キャンパストレジャー

神原文庫

第一章

詳細に残る記録をたどって、
貴重な資料の海へ漕ぎ出そう。

香川大学初代学長
神原 甚造

収集記録から浮かぶ几帳面な人柄

香川大学初代学長・神原甚造は、大正から昭和期にかけて書籍や古文書、絵画資料、古地図、美術品などを広く収集するコレクターでもありました。神原先生の没後に寄贈されたコレクションのうち、書籍類以外の骨とう品などは香川大学博物館に収められ、一方香川大学図書館が収蔵する史資料約1万2000点・所蔵本約1万6000冊は「神原文庫」と呼ばれています。

ここでいう「文庫」は文書・図書類のまとまったコレクションを指し、金沢文庫や足利文庫をはじめ有名な文庫が全国各地に存在しますが、神原文庫が特徴的なのは、収蔵品をいつ・どこで購入したかの記録が神原先生自身の手で詳細に残されていること。「日付や購入場所を記した『古資料収集記録帖』とともに、購入時の領収書や請求書、本屋とやりとりした書簡が残っているものもあり、ここまで記録が伴ったコレクションは全国でもきわめて珍しいと思います。おそらく神原先生は非常にマメな人だったんでしょうね」と、教育学部の守田逸人教授。

コレクションは辞書・文法書や人文科学・社会科学・自然科学系の書籍、雑誌新聞や錦絵、公文書から私文書や証文まで、和書・洋書を問わず多岐にわたります。中には、天皇や名僧らの墨跡と伝わる180枚を収めた『古筆手鑑』、ごく初期の版とされる『解体新書』、1822年刊行の蘭和辞書『バスタールト辞書』、1872年刊行の福沢諭吉の代表的著作『学問のすすめ』、徳川家光ら徳川将軍家の朱印状、昔話を素材とした浮世絵『昔ばなし舌切雀』といった貴重なものも少なくありません。15世紀に朝鮮半島で刊行された日本語教科書『伊路波』、井原西鶴『嵐無常物語』下巻などは、全国でも神原文庫にしかない稀覯書です。

『古筆手鑑』古筆切貼交折帖［江戸後期］編
伝聖武天皇等宸筆や伝弘法大師など著名人の書などが収められている。

『昔ばなし舌切雀』歌川芳盛戯画（元治元[1864]年）
舌切雀の昔話を素材とした浮世絵。
珍しいのは、正直爺さんが開けた葛籠から戦支度をした雀たちが現れ妖怪・化け物集団と戦っている。

『解体新書』杉田玄白訳（寛政10[1798]年）
ドイツ人医師クルムスの医学書の
オランダ語訳本をさらに日本語に翻訳した。
小石元俊の校正書入れがある。

『伊路波』朝鮮版
（弘治5（明応元）[1492]年）
朝鮮人が日本語を学習するための
教科書として刊行された。
神原文庫のみ残存すると考えられている。

『徳川家光朱印状』
（慶安元[1648]年9月17日）
徳川家光朱印状

『学問のすゝめ』福沢諭吉
（明治5[1872]年刊）
福沢諭吉の代表的著作。
「一 天は人の上に人を造らず」から始まる。

明治～昭和初期は空前の「収集ブーム」

神原先生は1884年に多度津町で生まれ、丸亀中学校、第三高等学校を経て京都帝国大学法学部へ進学。大学卒業後は司法官として活躍し、1925年から1945年まで大審院判事を務めます。1950年に65歳で香川大学の初代学長となって郷土に戻り、香川の教育・文化発展に尽力しました。

高校時代から文芸誌『明星』に短歌を発表するなど歌人としての顔も持ち、神原文庫には神原先生自身の日記や歌集、講演録も含まれます。小学校に上がる前に祖母に「読本」を教わって「文字」に興味を持ったことが「私を今日に導いた最初の道標でもある」と、晩年に回想しています。

コレクションの記録は1922年から1950年まで存在し、特に昭和初期までの熱心な収集ぶりがうかがえます。時には、一度に300点近い史資料を購入することもあったようです。「正確にいつから収集を始めたかはわかりませんが、1918年にご夫人を亡くされていて、それもコレクションに打ち込むきっかけの一つだったかもしれません」と守田教授。

明治～昭和初期は、日本の文化財が市場中に大量流出した時期でもありました。富裕層や知識人層を中心にコレクションが大ブームとなり、神原文庫も知識人による収集例の一つです。

文化財的な古書を扱う古書肆も数多く、神原先生の「記録帖」には「玉林要之輔」「厳松堂」「一誠堂」をはじめ、関西圏や東京の有名な古書肆の名が連なります。店舗や露店まで買いに行くだけでなく、こうした業者が「珍しい品が入った」と声を掛けてきたり、自宅まで直接販売に来たり、晩年には即売会に足を運んだりと、コレクションの入手経路はさまざま。記録帖に残る入手元は240を超えます。

蔵書印から伊藤博文が旧蔵していたことがわかる書籍などもあり、収蔵品が神原先生のもとに渡るまでに誰の手を経てきたかも興味深いところ。貸し出しや売却したものについても細かく書き残されており、神原先生の記録帖そのものが、当時のコレクターたちのリアルな収集動向を伝える貴重な資料といえるでしょう。

『東大寺年預五師某書状』
年月日未詳（鎌倉時代前期）

散逸文書も発見！収蔵品は可能性の塊

守田教授は『東大寺文書』の研究を通じて神原文庫に出合いました。東大寺文書は東大寺に伝わる奈良～江戸期の古文書群で、中世以前の文書の大部分は一括して国宝に指定されています。明治時代に散逸したものも多く、流出文書群は136件以上に上ります。「2016年に本学に着任して、『ひょっとしてあるんじゃないか』と神原文庫を調べてみたら、流出した文書のうち3件が見つかったんです。非常にうれしい発見でした」。見つかった東大寺文書はいずれも鎌倉時代のもので、類似する史料はほとんど残されていない貴重なものだとか。

コレクションを詳しく調べていく中で、甲斐国を追放された後の武田信虎（武田信玄の父）との関係がうかがえる室町幕府13代将軍足利義輝の書簡など、重要な史料が出てきたことも。神原文庫は、新発見につながる可能性をまだまだ秘めていそうです。

『東京日々新聞（錦絵）』（明治5[1872]～8[1875]年）
「東京日々新聞」は、現「毎日新聞」（東京本社版）の前身。
新聞に出たニュースを題材とする新聞錦絵で発売と同時に評判となった。

デジタル化も視野に入れ再調査中

神原文庫の収蔵品は、研究目的であれば事前予約の上で直接閲覧できるほか、現物を撮影したデータを提供する複写にも対応しています。こうしたサービスを通じて貢献した研究は数多く、大学図書館の一角には神原文庫が関わった研究の献本コーナーも設けています。

一方で、「記録帖には載っているのに存在しないものや資料の一部が欠落しているものも見られ、収蔵品のより詳細な調査と目録のアップデートは今後の課題の一つです。「図書館では昨年から少しずつ整理を始めています」と、神原文庫の利用に携わる司書の河原佳子さん。整理を進めている情報図書課では、目録をきちんと整え直すとともに、デジタルアーカイブの充実も視野に入れています。「資料は保存と発信の両輪が大切です。全国・世界各地から気軽にアクセスできる環境を整え、さらにさまざまな研究に貢献していくためにも、本格的なデジタルアーカイブ化に期待したい。」と守田教授と河原さん。

『みだれ髪』初版
鳳（与謝野）晶子（明治34[1901]年）
与謝野晶子の処女歌集。
初版本は、晶子が与謝野鉄幹と結婚する前に刊行されたため鳳姓になっている。

『青鞜』創刊号 青鞜社
（明治44[1911]年）
平塚らいてうにより
創刊された女流文芸雑誌。

大発見につながる資料が眠っているかも

香川大学図書館中央館
業務委託スタッフ
河原 佳子（かわはら よしこ）
香川県出身。東京都町田市立中央図書館、法政大学多摩図書館、千代田区立千代田図書館等での勤務経験後、2013年より香川大学図書館中央館に勤務。主にサービス業務に従事。2015年より神原文庫の担当となり、個人や博物館・出版社等との利用対応を行っている。

香川大学教育学部教授
守田 逸人（もりた はやと）
東京都出身。早稲田大学大学院文学研究科史学（日本史）専攻博士後期課程修了。博士（文学）早稲田大学（2007年）香川大学教育学部准教授を経て、2022年4月より現職。専門は日本中世史、荘園景観の復元研究、中世史料学など。